

「日常生活に場面における意思決定支援の取り組み」

○発表者名 社福) 祥和会 祥福園 青木隆  
共同研究者名 社福) 祥和会 祥福園 蔵本淳也

### 1. 問題提起

自閉症等における日常支援の中で、利用者に選択を求める場面は多い。

しかし…利用者が言葉として返答していても、本当に理解して選んでいるのか判断が難しい。同時に複数の要求を伝える、あるいはその場の状況と異なる発言をすることがあり、職員の対応に迷う場面がある。職員ごとに声掛けや判断基準が異なり、関わりにばらつきが生じていた。

このような状況は、利用者の混乱や不安を高めるだけでなく、支援の質が安定しない要因になっていると考えました。

### 2. 目的

本実践では、自閉症棟において以下の2点を目的とした。

1つ目は、利用者が日常生活の中で「自分で選ぶ」経験を積み重ねることである。

大きな意思決定だけでなく、日々の小さな選択を大切にすることで、意思形成を支援したいと考えました。

2つ目は、支援の視点や関わり方を職員間で共有し、一貫した意思決定支援を事であると考え、個々の判断に任せるのではなく、共通の考え方を持つことを目的としました。

### 3. 方法

対象は自閉症棟の利用者とし、日常支援の中で以下の4点を支援の軸として実践しました。

① 普段から選ぶ経験をつくる。

活動内容、順番、時間など、日常生活の中で選択できる場면을意識的に設定した。

② 大事な場面に限らず、日常すべての場面で確認する。

言葉での確認だけでなく、行動や表情など非言語的な反応も含めて確認を行った。

③ 言葉より、様子を見る。

発言内容だけで判断せず、実際の行動が伴っているかを重視した。

④ これから何が起きるかを伝える。

次の行動や見通しを事前に伝え、不安や混乱の軽減を図った。

### 4. 成果・課題

研究するにあたり利用者を細かく観察することで、それまで知りえなかった利用者からの表出や表現あるいは反応を少しずつ知ることができた。その反面課題も沢山見えてきた。

#### 成果

- ・ 選択場面における利用者の混乱が減少した。
- ・ 見通しを伝えることで、落ち着いて行動できる場面が増えた。
- ・ 職員間【ユニット内全職員ではないが…】で関わりを共有することで、支援の方向性が揃い、一貫した支援に繋がりがつつある。

## 祥福園 かがや ユニット

### 課題

- ・現時点では、すべての職員が同じ視点で関わっているわけではない。
- ・情報共有の方法が統一されておらず、継続的な共有に課題が残る。
- ・今後は、ユニット内で記録様式や申し送り方法の工夫を行い、ユニット全体での定着を図る必要がある。

以上

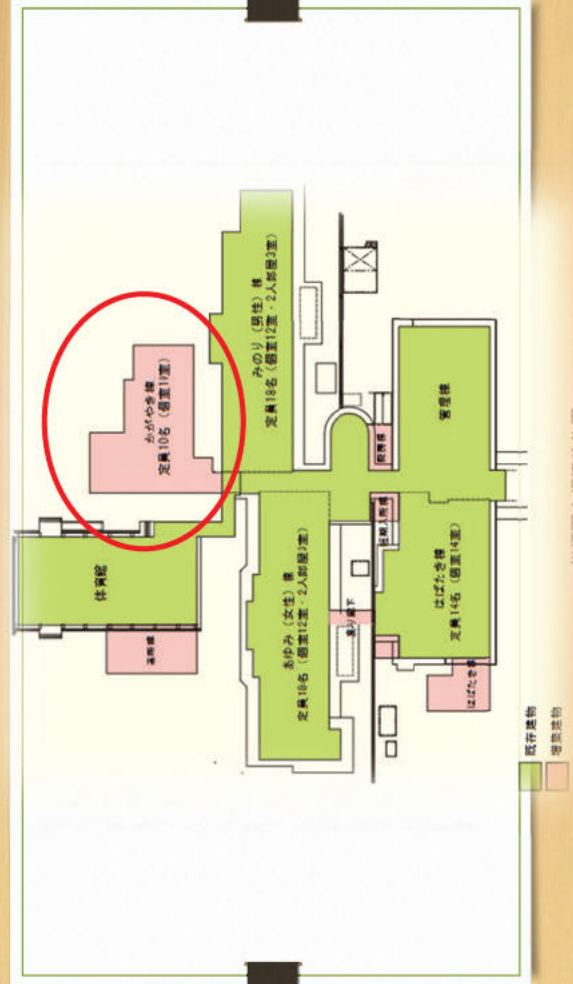


## 日常生活場面における 意思決定支援の取り組み

発表者 祥福園かがやき機チーム  
蔵本 青木

### 概要

本発表では、自閉症支援ユニットにおける意思決定支援の実践について報告します。自閉症のある利用者さんに対し、日常生活の中で「選ぶ経験」を積み重ねることを大切にしながら、大事な場面に限らず、日常すべての場面で確認を行う支援、言葉による確認だけでなく行動や表情など様子から意思をくみ取る支援、そしてこれら四つの視点を軸とした支援の取り組みを通して、利用者の安心感や主体性の変化、職員間での支援共有の重要性について考察します。



### 現場でよくある悩み

支援の中で…

「本当に理解しているのかな？」  
「とりあえず『はい・うん』と言っているだけでは？」

と悩むことはないでしょうか。  
これは新人職員だけでなく、経験のある職員でも日々感じることではないでしょうか？

### 対象利用者さん

- ・ 日常会話は可能だが、内容理解度の判断が難しい利用者さん
- ・ 自閉症＋知的障害がある複数の利用者さん
- ・ 祥福園かがやき棟利用者全体を対象とする

### 大切な考え方

ここで大切なのは・・・

『分らない人』と考えるのではなく、  
『分かる伝え方になっているか』と考えました。

利用者さんが変わるのではなく、支援のやり方を変える、  
という視点です。

### 全体構成（実践内容）

- ① 普段から『選ぶ』の経験を作る
- ② 大事な場面に限らず、日常すべての場面で確認する
- ③ 言葉より、様子を見る
- ④ これから何が起こるかを伝える



### 全体構成（実践内容）

- ① 普段から『選ぶ』の経験を作る
- ② 大事な場面に限らず、日常すべての場面で確認する
- ③ 言葉より、様子を見る
- ④ これから何が起こるかを伝える

### ① 普段から『選ぶ』経験をつくる

- ・ 極小の選択を日常に組み込む
- ・ 「選ぶ＝成功体験」になる利用者さんの好み・理解レベルが職員間で共有可能



・ 体操orトランプ

・ 目薬or歯磨き

・ パジャマ着替えorカーテンを閉める



👉 支援者が決めるのではなく「どっちにする？」  
「先はどれ？」と選ぶ経験を積む

👉 必ずどちらもOKな選択肢にする

### 全体構成

- ・ ① 普段から『選ぶ』の経験を作る
- ・ ② 大事な場面に限らず、日常すべての場面で確認する
- ・ ③ 言葉より、様子を見る
- ・ ④ これから何が起こるかを伝える



## ②大事な場面に限らず、日常すべての場面で確認する

なぜ「確認」が必要なのか？

- ・その時の気分や体調による判断を避けるため
- ・支援者の誘導や思い込みを防ぐため
- ・本人の「**本当の意思**」を尊重するため
- ・後から「**本当は違った**」というトラブルを防ぐため

特に自閉症のある方や知的障害のある方の場合・・・

- ・その場の雰囲気
- ・直前の出来事
- ・支援者の言い方の影響を受けやすいため、大事な場面に限らず、日常すべての場での確認が重要だと考えました。

## 理解確認

意思決定支援では、本人がどう答えただけでなく、その意思が安定しているか、また内容を理解して選んでいるかが重要だとも考えました。

今回の研究では、日常すべての場面で確認によって意思の一貫性を確認し、理解確認によって選択内容の理解を確認する支援を行いました。

この2つを組み合わせることで、本人主体の意思決定が可能になると考えました。

次に、いくつかの理解確認の実践例を紹介したいと思います・・・

## 理解確認 実践例①

- ・意思確認  
「テレビを見る？」

→「うん」

- ・理解確認

「テレビを見ると、おやつは後になるよ？いい？」

→「うん」とうなずく

👉 時間の変更を理解して同意

うん



## 理解確認 実践例②

- ・意思確認

「もう食事は終わりでですか？」

→うなずく

- ・理解確認

「これを残すと、あとでお腹がすくかもしれないけどいい？」

→少し食べる

食べるわ



👉 非言語的な理解確認も有効

### 全体構成

- ・①普段から『選ぶ』の経験を作る
- ・②大事な場面に限らず、日常すべての場面で確認する
- ・③言葉より、様子を見る
- ・④これから何が起こるかを伝える



**理解確認**とは、説明後に本人の言葉・行動・選択を通して、  
「分かったつもり」ではなく、「**本当に理解しているか**」を  
確かめる支援である！！

### ③言葉より、行動を見る

・自閉症利用者の意思決定支援において、  
『はい』『いいです』という言葉だけで本人の理解や納得  
を判断してよいか、という課題がありました。

そのため、**言葉だけでなく行動を重視する支援を切り替え  
てみました！！**

### 具体例の展開

ある利用者さんが時々、複数の要求を同時に伝える場面がある。



実例…

①チョコ～/シート

②コーヒーは～？/シャワーする～

👉言葉だけでは本当の意図は分かりにくい！

👉視線・動き・表情など行動から意思を読み取る支援が重要と考えました。

「コーヒーは？」 「シャワーする」を同時に発言

言葉だけで判断

【支援】  
・「さっきコーヒーを飲んでしまったよ」と決めたよ

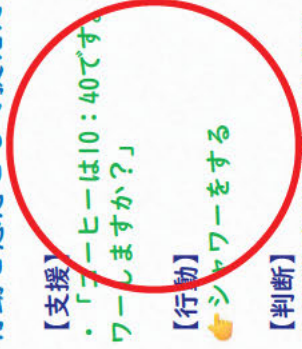


・行動確認をしていない

【結果】  
本人の意思とずれる

行動を意思として捉えた

【支援】  
・「コーヒーは10:40です。先にシャワーしますか？」



【行動】  
シャワーをする

【判断】  
言葉ではなく行動を尊重

実例①

「チョコ」 「シーツ」を同時に発言

言葉だけで判断してしまった

【支援】  
・「どっち？」「はっきり言って」



…発言の正確さを求めてしまった

【結果】  
混乱・不安が強まった

行動を意思として捉えた

【支援】  
・チョコは7時、シーツは9時です

【行動】  
チョコを食べる

【判断】  
行動から意思を確認できた

全体構成

- ① 普段から『選ぶ』の経験を作る
- ② 大事な場面に限らず、日常すべての場面で確認する
- ③ 言葉より、様子を見る
- ④ これから何が起こるかを伝える



④ これから何が起こるかを伝える

・ TEACCH応用（自閉症スペクトラム症の人を支援するための包括的な支援プログラム・考え方）

理解の曖昧さを減らすため、「選ぶ→何が起こるか」までをセットで視覚化。

ですが…実際の支援では、口頭での説明・声掛けが中心となっており、視覚的な支援が十分に活用できていません…



### ユニット共有

- ・選べた時の関わり方を具体的に共有  
…写真・2択・待つ時間など
- ・うまくいかなかった関わりも共有  
…混乱した要因を確認
- ・言葉以外の意思表示を職員間で共通理解  
…表情・行動・落ち着き具合
- ・意思が確認できない場面での職員の判断基準を統一する  
…決められない状態も尊重

個人対応にせず、  
チームで支援すること  
がポイント!!

### 重要な考え方

- ・決められない→分解する
- ・×「理解できていないから決めさせない」
- ・○「理解できる形に分解して、決められるところまで支援する」
- ・×正解かどうか
- ・○本人が納得して参加できたか

### 評価方法

項目	今までの支援	新しい支援
職員の声掛け	指示中心 →	選択確認中心
拒否行動	多い →	減少
選択行動	ほぼなし →	指さしあり

### 結果

- ・選択提示後（口頭・声掛け）、自ら行動を起こす場面が増加
- ・職員の繰り返し声掛け・説明を待たず、選択までの時間が短縮
- ・混乱や拒否行動が見られる場面が減少
- ・「確認」を求め視線や行動が増えた  
一方で…  
初めての内容や環境変化が大きい場面では、迷いが見られました…

## 考察

- ・言葉での理解確認よりも、行動や様子を評価することで本人の意思をより正確に捉えられた。
- ・日常的に「選ぶ経験」を積むことで、選択そのものへの不安が軽減された。
- ・一部の職員間で関わり方を共有したことで、一貫した支援に繋がる兆しが見られた。

課題も見えてきました…

## 課題

- ・新しい場面や選択肢が増えた際に、迷いや不安が見られる
- ・行動や様子の捉え方が、職員ごとに異なる場面があった
- ・支援や評価の視点が、文章として十分に整理されていない

今後に向けて…

- ・口頭中心の支援を見直し、視覚的支援を段階的に導入する
- ・行動評価の視点を明確にし、職員間で共有する
- ・初めの場面では、事前提示や段階的な選択を取り入れる
- ・実践を記録として残し、継続的に見直す

## まとめ

本研究を通して、意思決定支援においては「どれだけ説明したか」ではなく、「本人がどのような行動したかを見ること」の大切さを改めて感じました。

今後も、日常の小さな選択を大切にしながら、利用者一人ひとりの意思が尊重される支援を継続していきたいと考えています。



ご静聴ありがとうございました